跡見学園女子大学国文学科報　第二十四号　（平成八年三月十八日）

『銀河鉄道の夜』試論
――手に入れた切符――

清澤邦代

第一章　夢の町

私がこの作品を読んだのは、中学一年生の時であったと思う。本を閉じた後、何ともいえぬ気持ちが湧きあがってきたのだ。それは銀河の旅中、北十字を通過した後旅人たちが感じている「胸いっぱいのかなしみに似た新らしい気持ち」（七）に近いものであり、「ほんたうのさいはひ」（九）とは何なのか、私の生き方はどうかといった問いかけでもあった。そこで今だに抱き続けるその衝撃がどこから生じるのか、自分なりにしっかり読み解きたいと考えた。

市川浩氏の『〈身〉の構造』を参考に、まずジョバンニの身のあり方を探ってみた。

ジョバンニは祭の夜、「そこらのにぎやかさとはまるでちがったことを考へながら」（四）母の牛乳をとりに歩いていく。その内的世界にいかに没頭しているかということは、

「ジョバンニは、いつか町はずれのポプラの木が幾本も幾本も、高く星ぞらに浮んでいゐるところに来てゐました。」（四）（傍点、清澤）

という部分からもわかる。彼の心身は分裂状態といえよう。景色が目に入らないほど、何をそんなに考え込むのだろうか。それは授業中のジョバンニをみると察することができるのだ。

先生に銀河とは何か聞かれ、星と分かりつつ答えられないジョバンニ。その時、ジョバンニの心の声が登場する。内なるジョバンニは「カムパネルラのお父さんの博士のうちで」（一）カンパネルラと二人で過ごした日々を思い出している。先生の話は耳に入っていないであろう。授業という現実から離れ、彼の心の世界へと入っている。彼の現在の身の上は、母との会話から父親が漁に出ており家にはいないこと、母親は病気のために

寝たきりであることがわかる。そのために、彼は「活版所」（二）で「朝にも午后にも」（一）働かねばならない生活を強いられている。「学校から帰る途中たびたびカムパネルラのうちに寄った」（三）「あのころ」（三）は、父親も一緒に住み幸せだったのだ。「あのころはよかったなあ」（三）と感じていることから、「あのころ」の世界と比べて現実の世界、現在の自分をとらえていることがわかる。だからジョバンニは質問に答えられない自分を「あのころ」の自分と比べて「あはれ」（一）に思うのである。

ジョバンニは過去の「あのころ」の世界をもとにしつつ、現在の自分をとりまく世界の中で存在している。つまり、彼の「身の原点」[注1]が現在ではなく、過去にあるといえるであろう。当然、自分の外の世界と内なる自分にずれが生じる。ずれがあるにもかかわらず、現実、現在という外の世界で生きねばならぬ。身体の内と外という、二つの世界に分裂して存在するジョバンニなのだ。彼は内なる世界に安定するべく、「学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云はないやうに」（一）なる。

ではその分裂はなぜ起きるのだろうか。過去にこだわるジョバンニの謎を解く鍵が、「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着が来るよ」（四）という言葉である。

カムパネルラの父が「博士」（一）であるのとは対照的に、ジョバンニの父は漁師であることに注目するべきであろう。それは「軽便鉄道」（六）に乗るということに関係すると思うのだ。軽便鉄道は地方への近代化の代表的なものといえる。地方と中央が時間的、文化的に近づく反面、近代国家の中央集権体制が敷かれ、地方が支配される側になることにもつながる。それがもたらすのは、漁師などの第一次産業中心の農村的世界から、近代資本主義の世界への変化であった。[注2]それはジョバンニ自身も「活版所」という、近代工業の場で働いていることに表れているといえよう。

〈近代工業―漁師〉

社会構造の変化により、近代工業中心のもののとらえ方、その見方を中心とした二項対立的なイデオロギー、

〈見る―見られる〉

〈中心―周縁〉

という関係が作り上げられる。こうして漁師という職業は「疎外」[注3]され、周縁的なものとされてしまうのだ。ジョバンニ自身は父親のことを大きな存在と考えようとしても、彼が「組みこまれ」[注4]ている現実の世界の意味づけにより無化されてしまうのだ。よって、周縁的存在の子供であるジョバンニも周縁の存在とみなされ、見られる存在となり、差別される存在となるのである。

このようにジョバンニが過去の世界にこだわるのは、父親の存在が大きな影響を与え、「らっこの上着」が示す差別という問題も関わっていると考えられるだろう。

「らっこの上着」とからかわれることなく、つまり〈見る―見られる〉の関係に「組みこまれ」ることなく暮らせたのが、「あのころ」であったと思われる。それが素となり、ジョバンニの分裂、ジョバンニの内と外、

〈過去―現在〉
〈空想―現実〉

が生じてしまうのである。自分が差別される存在であることを意識させるのが「らっこの上着」という言葉であり、分裂の引き金ともいうべきものなのである。

ジョバンニの内外両方の世界に存在していたのがカムパネルラであった。他の人のようにからかうことなく「気の毒さうにしている」(三)カムパネルラは、授業中の態度からもわかるように、表立つものではないが以前と変わらないジョバンニへの友情をもっているといえよう。カムパネルラという、〈現実―空想〉・〈現在―過去〉をつなぐ存在により、ジョバンニは内と外に分裂しつつ現実の世界に存在できたのだ。周縁的存在としての外の世界での身体の他に、カムパネルラと「きっと一緒」(三)という「あのころ」にもとづく共生関係を築き、それを中心として「身の統合」[注5]を保ったといえよう。

ところが祭の夜、「きっと一緒」という思いは裏切られる。ザネリ達に会いからかわれたジョバンニは、逃げたものの「ふりかへって」(四)みる。カムパネルラもザネリ達の中にいたのだ。彼はきっとカムパネルラも振り返って自分を見ていることを望んだに違いない。ところが振り返っていたのはザネリであり、当のカムパネルラは「歩いて行ってしまった」(四)のである。「きっと一緒」である内なる世界のカムパネルラと現実のカムパネルラとの違い、それは内なる自分と現実の外の世界を結びつけていたカムパネルラからも、「疎外」されてしまったということである。

よってジョバンニは町という生きる空間から脱け出し、異の空間である「天気輪の柱」(五)の立つ丘を目指すことになる。そこで身を投げだして星空を見つめているうちに、眼の前がおぼろとなり、ジョバンニは銀河鉄道に乗車しているのだ。

この場面は、だれもが体験しているであろう、凝視の状態に近いものであり、一種のトランス状態ともいえるであろう。ジョバンニには銀河が「野原のやうに考へられて仕方なかった」(五)のである。彼のまなざしは、知として銀河を知る以前の人間が抱く、原始的な感性によるものである。何も介さない、ありのままのジョバンニの物の見方、身のあり方が、乗車を可能にしたと思われる。

町でのジョバンニはいくつもの関係の中におかれていた。学校での先生と生徒、労働という賃金の享受の関係、そして見る、見られるの関係である。関係の中に「組みこまれ」、「疎外」されていたのだ。その中で自分を意識できるのは、カムパネルラと母の存在、それに「らっこの上着」によるものであった。「天気輪」のもとに来ることにより、「らっこの上着」とからかわれ

ることもない。カムパネルラとのつながりは絶たれたかのように思えるが、その呪縛から逃れたともいえる。そして母の牛乳が手に入らなかったために、かえって母の存在が意識から遠ざかるといえよう。こうして何ものにもとらわれないジョバンニとなることができたのだ。対他者、対世界での自分を意識することなく、内なる自分そのままに銀河を見つめるジョバンニ。その時彼は、対世界の身体を無化した状態なのである。身体を無化したからこそ、死者の乗る銀河鉄道に乗車できたのだ。ジョバンニの乗車の秘密はそこにあると考える。

ジョバンニの父は実際には町に存在しないが、「らっこの上着」という言葉をとおして存在する。祭も日常生活の中にはないが、制度として存在する。いずれも人により作りあげられたものであり、実体のないものである。ただ意識化された「仲だち」(注6)に「組みこまれ」るだけで、「見る—見られる」、「中心—周縁」という対立が生まれる場、それが町なのである。関係や観念という、目に見えないもので成り立つ幻想の町でもあるのだ。つまり、現実と幻想は表裏一体のものである。目に見えるものがあるからこそ、見えないものが生まれる。目に見えるものも見えなくなるというのが「夜」なのだ。ジョバンニは自分の生を生きるため、カムパネルラと一緒という夢から覚め、祭の夜、この町から旅立つのである。自らが世界に意味づけをするべく、生の中心へ行くために、「夜の軽便鉄道」(六)に乗車したのである。

第二章　生のパズル

ジョバンニにとって銀河鉄道での体験はどのような意味があったのか、探っていきたいと思う。

まず鳥捕りについてみていこう。「八、鳥を捕る人」と章題になっている点は注目すべきであろう。ジョバンニは鳥捕りに「黄いろな雁の足」(八)をもらって食べる。その時

「けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべてゐるのは、大へん気の毒だ」(八)

と感じている。乗車前は「中心—周縁」という関係の中、ジョバンニは見られる側として自分を意識し、存在していた。見られる立場を拒むために、そうではなかった「あのころ」の内界にこもり、外の存在へ働きかけることはなかった。ここでは見る立場となり、鳥捕りという外の存在に目を向け、鳥捕りの立場となって「気の毒」と感じるのである。そうして「なんだかわけもわからずに」(八)鳥捕りが「気の毒でたまらなく」(八)なるのだ。なぜそんなに気の毒なのか考えてみると、鳥捕りは常に自分の外の世界にあわせて行動しているように見えるからではないだろうか。外の世界での関係の中でしか存在できないような鳥捕りなのだ。ジョバンニたちのために獲物を出したり味見させたり、ジョバンニの切符を見たとたん態度を変えたりと、主体的な面があまり感じられない。だからこそ、「ほんたうにあなたのほしいものは一体何ですか」(八)と尋ねたくなるの

だ。ついにジョバンニは「持ってゐるものでも食べるものでもなんでもやってしまひたい」（八）と思うようにさえなる。

最初は鳥捕りの立場となったのみのジョバンニだったが、彼に対して自分はどうすればいいかという意識が生まれている。つまり、外の存在への働きかけにより、外なる身体としての食べる自分、気の毒に思う内なる自分が統合されて、鳥捕りのために何をすべきか考える、主体的なジョバンニとなるのである。

現実のジョバンニと鳥捕りは、他者と関わる関わらないの違いがあるが、他者により疎外されている点では同じといえよう。鳥捕りは自分という核がないように感じられる。まさに「鳥を捕る人」だけの存在である。彼のためにジョバンニは、「ほんたうの幸」（九）を考えるという、内から起こる主体的な自分の核を得たといえるであろう。

関係の中にいるのではなく、見る主体となる自分というものをもったジョバンニは、「中心―周縁」という見方を克服することとなる。それは難破船の青年の話の場面をみるとわかるだろう。

「その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗って、風や凍りつく潮水や、烈（はげ）しい寒さとたたかって、たれかが一生けんめいはたらいてゐる。ぼくはそのひとにほんたうに気の毒でそしてすまないやうな気がする」（九）

ジョバンニは青年の、氷山のために沈没した船での体験談から、北の海での漁を連想して明らかに父の存在が意識されたと思える。しかしお父さんではなくて、「たれか」であり「その人」となっているのだ。ジョバンニは父のことを誇りに思いつつ、父というより自分も世間と同じように漁師という、「らっこの上着」が示す、周縁的な存在としてとらえざるをえなかったのではなかろうか。ジョバンニも社会に「組みこまれ」、その厳しい仕事、真実の働く姿を顧みることなく、実体のない「見る―見られる」という差別の中で、父を、むしろ父というよりその職業を見ていたのではないかと考えられる。自分の個人的なつながりの存在に対してだけではなく、もっと広い意味で漁をする人々をとらえたということだろう。父一人ばかりでなく、多くの「一生けんめいはたら」く人々への思いの表れ、それがこの言葉であり、「その人」、「たれか」の意味であると考えられよう。つまり、世間で作り出された「中心―周縁」という関係のレンズをとおしてとらえるのではなく、自分自身がいかにその中に入るか、その人の身になることができるかということを、ジョバンニの思いは示しているのだと思う。主体である自分が基点となり、対立したどちらか一方の立場からしかみないのではなく、二項の間を往復すること、これをジョバンニは得たのではないだろうか。

このように乗車前の「中心―周縁」という対立関係から解き放たれ、自分の存在を見つめるジョバンニ。他者へ目を向け、そのまなざしを再び自分に戻す。「内―外」の基点となり、「ほんたうの幸」（九）を求めようとする時、「ばらの匂」がする。

同時に「苹果」も登場することに気づく。鳥捕りの身を思った後、「苹果の匂」（九）と「野茨の匂」（九）がする。北の海で働く人を思い、「そのひとのさいはひ」（九）を考えるジョバンニと共鳴するかのように、燈台守と青年が「ほんたうの幸福」（九）について話している。それから「ばらの匂」（九）が漂い、本物の「黄金と紅とでうつくしくいろどられた大きな苹果」（九）が現れるのだ。匂は「窓からでも入って来る」（九）とあり、銀河をめぐる風自体が匂をもっているようだ。

ここで匂について考えてみる。嗅覚とは、「われわれ人間を世界のうちに溶解させ、われわれと世界との間に親密な関係をつくる感覚である」[注7]とあるように、根本的な身体から成り立つ感覚であるといえよう。匂は外の世界のものでありながら、私たちはその内に包み込まれるようになり、個人的に感じるが他人と共通した感覚をもつことができる。匂が汽車の中も外も満たされるというのは、「内―外」、「個人―全体」という枠組が無化されるような意味あいがあると思われる。そしてジョバンニの「内―外」、「個人―全体」という枠組が消失しつつある身のあり方に対応しているといえよう。

りんごについてみると、「ばらの匂」よりさらにその意味が強いばかりでなく、孤独ということがクローズアップされていることがわかる。

「カムパネルラの頬は、まるで熟した苹果のあかしのやうにうつくしくかゞやいて見えました」（七）

これは「北十字」（七）を通過するときの一場面である。旅人たちは「北十字」に向かって祈りを捧げ、「胸いっぱいのかなしみに似た新らしい気持ちを、何気なくちがった語で」（七）話し合っていることがうかがえる。この「かなしみに似た新らしい気持ち」とはどのような気持ちなのか。みながその気持ちを抱き、人それぞれ表現は違っても話をしているのだ。つまり、匂と同様、一つの共通した気持ちを全員が抱くということである。個でありつつ一つの全体の内にいる、全体を形成するともいえる汽車の内部空間とも類似しているといえよう。その気持ちを探るために「南十字」（九）の場面をみてみよう。

旅人はみな「子供が瓜に飛びついたときのやうなよろこびの声」（九）をあげ、「何とも云ひやうない深いつゝましいためいき」（九）をついている。ここに注目して考えてみたい。

「子供が瓜に飛びついたとき」（九）、それはおいしいと感じる自らの味覚によるものである。他者や外の世界とは関係しない、人間本来の感覚といえる。この十字架を見たときも、自らの内からの「よろこび」、聖なるものを感じたということなのだ。身体の内と外の別から生じる二項対立関係や他者にとらわれることない、聖を求めるという人間のありのままの状態になったことを示すのだ。祈りとは、聖なるものが自分の心の中、外の世界にあることを感じ、聖なるものの内に自分が存在できることを感じる行動といえよう。この時は自分の内も外も一致しているのだ。内外の一致した状態、それが聖といえるのかもしれな

い。ありのままの人間として存在できる空間を感じる「よろこび」の表現が、「子供が瓜に飛びついたとき」につながろう。

その空間の中で、聖なるものに位置づけられるのみのたった一人の自分も同時に認識されるのではないか。身体の内も外もない、絶対的な自分と向きあうことになるのだ。存在の孤独を知るともいえよう。その孤独を味わい、祈りの空間から現実の空間へ戻るときは、ちょうど母の胎内から生まれでる状態と似ていると思われる。絶対的な孤独さと、聖なるものとは一体になれない身体として存在する自分を意識するのが、「何とも云ひやうない深いつゝましいためいき」(九)に結びつくと考えられよう。絶対的な自分を知る、聖なるものに意味づけされなおし再び実存の世界へ目を向けること、それが「胸いっぱいのかなしみに似たあたらしい気持ち」なのだと思える。身体の内も外もない自分を知り、外の世界へと歩みだす際の心境である。それはジョバンニが青年と姉弟と別れた後、カムパネルラに「胸いっぱい新らしい力が湧くやうにふうと息を」(九)して、「僕たちしっかりやらうねえ」(九)と述べるのにもつながるのである。

りんごの実物が登場している場面をみよう。「ばらの匂」(九)の中、燈台看守の手もとにりんごが現れる。難破船の男の子はそれまで眠っていたのに急に目覚め、「お母さんの夢」(九)の話をし、即座にりんごを食べ始めるのだ。この弟の存在はまるで無邪気であり、「純粋無垢な状態などに強調点がおかれている」[注8]ことから、「始源児」[注9]のような存在であるといえよう。弟の人間としてあるがままの姿、夢の中にもりんごが現れることに象徴される内と外の一致した姿。それは絶対的な自分の存在を知り得た祈りの空間の再現ともいえる。弟ももたらしたであろう聖なる空間の証として、ジョバンニとカムパネルラは「りんごを大切にポケット」(九)の中へと入れるのである。

このようにジョバンニは何ものにもとらわれない、関係を築く基点となる自分に出会う。だが、自分という存在の孤独さが、「みんなのほんたうのさいはひ」(九)を求めるジョバンニにとって大きな影をもたらすことが、

「あゝほんたうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだらうか」(九)

という言葉に表れている。自分というたった一人の存在であるからこそ、他者の存在、外の世界、それに他者に対しての自分がとらえられる。しかし、孤独から逃がれようと他者と一つになりたいとも思う。すると、自分という存在は成り立たなくなる。私たちの存在自体に大きな矛盾があるのだ。孤独により存在できる自分とその淋しさ。他者と同一になりたくても身体の別により、それは不可能である。かといって身体が別れていなければ自分を把握できない。人間存在自体の矛盾、そして存在する世界に対しての矛盾、その分裂した裂け目こそ、ジョバンニの前に現れる「石炭袋」(九)、「そらの孔」(九)なのではなかろうか。それは宇宙空間の「内―外」もない無という空間、

自分という主体がなければ無となる空間でもあるから、虚無というものにつながるだろう。ジョバンニの淋しさ、「そらの孔(あな)」は、人間存在の根源的なものであり、メビウスの輪のように続く葛藤を意味するのではないだろうか。

ジョバンニはこの銀河体験により、自分の存在を把握し、見られる存在ではなくなったといえよう。乗車前のように生から疎外されているのではなく、自ら生の中心へと歩み出したのだ。身体の内と外での分裂、自分の身の内での分裂を統合していくべく、「ほんたうのさいはひ」を求めるジョバンニとなったのだ。

町の内から外へ、そして銀河という現実世界の外へ移動し、再び町へ戻るジョバンニ。

ジョバンニの銀河の旅の始発着の場であるのが天気輪の柱のもとである。重要な地点であるのに、不思議なことに具体的描写はない。丘の頂にあり、町はずれで町が見渡せる場所であることはわかる。「白く星あかりに照らしだされて」(五)いる林の小道を登っていく様子は、「聖なる奥」[注10]といえる空間へ近づいていくことを示すのだろう。また、「天気」や「柱」ということから、天と地をつなぐ宇宙軸のように考えられる。従って、天と地が別れる前の始源的空間であり、二項対立関係が生まれる前の空間、聖なるものに意味づけがされる空間といえるのであろう。パラドックスにみると、二項対立的なものを統合できる空間ともいえよう。対立関係を超え、分裂から統合に至ることが可能な空間でもあるのだ。統合のシンボルとなるのがこの柱のように思える。

つまり、ジョバンニが「ほんたうのさいはひ」を求める自分を作りあげ、統合していった銀河体験を象徴するのが、「天気輪の柱」なのだと思う。

人は孤独という枠組の中、他者、世界との間にある裂け目、また存在自体に潜む分裂を乗り越え、それぞれ自分というパズルを作りあげていくのである。

第三章　はてしない旅

ジョバンニの言う、「ほんたうのさいはひ」(九)とは何なのか。その答えはジョバンニでさえ分からないのである。「ほんたうのさいはひ」というと唐突に思えるが、私達が忘れかけていた人間本来の願いのようにも思える。私はここで無謀にもその答えを見つけるべく、物語を探っていきたい。

この銀河空間には青年と姉弟のゆく天上と、カムパネルラのいく天上と二つのものがある。それぞれの天上へ行く過程をみていくと、青年は「いちばんのさいはひ」(九)を求め、カムパネルラは「おっかさんのいちばんの幸」(七)を求めたといえる。

青年たちは「サウザンクロス」(九)で下車している。青年は家庭教師として幼い姉弟を連れて日本へ帰国する途中、船の事故に巻き込まれ、三人とも海の藻屑と消えたのだ。青年は救援用ボートに姉弟を乗せるか否かの葛藤の末、「このまゝ神のお前にみんなで行く方がほんたうにこの方たちの幸福だ」(九)と、

二人を抱いて死を選んだことがわかる。まず二人を助けようとするが他の人を「押しのける勇気がなかった」（九）。そこで家庭教師の義務として自分を奮い立たすが、他人を犠牲にしてまで助けるよりも死を思う。他者の姿を見るととても押しのけることはできなかったのである。姉弟を助けたい自分、神の下僕としての自分、父母のもとに二人を送り届ける使命のある自分、他の父母の身となった自分、と青年の身はいくつにも分裂する。そこには、助けたいという純粋な思いは、他者の存在により他者を犠牲にする悪となってしまうという矛盾が存在する。その矛盾に対して分裂し葛藤する身を、青年は神のもとに統合していくのである。神の教えでは、人を犠牲にする勇気がないということは、善なる行いとして自分たちが犠牲となることで解決する。反対に、他者を犠牲にするのは「神にそむく罪」（九）となるのだ。自らの命を犠牲として神のいる天上へ行くという、「いちばんのさいはひ」（九）のために、青年は統合され、死を選択したといえよう。しかしそれは、ありのままの助けたいという自分の気持ちと二人の子供の気持ちを、神という媒介により押し込めてしまった、犠牲にしたともいえるのである。内なる自分と対世界の身体は一致しなかったのだ。真からの死の選択ではない。だから青年は「額に深く皺を刻んで」（九）おり、姉である少女も「いきなり両手に顔をあててしくしくと」（九）泣きだすのである。生に対する、ネガティブな死のとらえ方となるのだ。

カムパネルラの死はどうであろう。彼はザネリを助けるために水死したのだ。彼は、「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか」（七）と述べ、自分の死が母を悲しませるというのを気にしているようである。カムパネルラは対世界の存在として、自分が犠牲となり人を助けるのは「ほんたうにいいこと」（七）であるという概念に基づいての行動をとったと考えられる。ザネリを助けるというのも、ザネリのためというより、人を助けることに意味があったのではないだろうか。「ほんたうにいいこと」の実現が、偶然ザネリの救助という形になっただけかもしれない。母親の立場となると、自分の死は「いいこと」ではない。自分と母は「いいこと」により引き裂かれてしまうのだ。その葛藤は「ほんたうにいいこと」が自分の「いちばんの幸」（七）であり、母親からみても犠牲としての息子の死が「いいこと」、すなわち「いちばんの幸」であると考えることにより、ザネリを救う行動へと統合されたのだ。しかし、それが「ほんたうに」母親の幸せといえるのか、疑問があるのだ。「いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだろう」（七）と泣きだしそうになるカムパネルラなのである。

青年は自分の命をもとから捨てる気で姉弟を助けようとした。カムパネルラはザネリを救うために命を捨てた。二人は自らの命にはこだわらなかったが、命が他者に対して捧げられたのではなく、結局は犠牲という概念、それが「いちばんのさいはひ」であり「いいこと」であるという「仲だち」をとおした

ものであるといえるのではないか。青年は神のもとへ行くという幸、カムパネルラは母親のための幸を求める手段としての、自らのための死であると思えるのだ。「仲だち」により「組みこまれ」た死であり、「さいはひ」のための死であったといえよう。それぞれの「組みこまれ」の違いが二つの天上となるのではないかととらえられる。

そのように見てくると、ジョバンニの言う「たったひとりのほんたうのほんたうの神さま」（九）の意味がつかめるだろう。犠牲という行為ならば、他者そのものに命を捧げることができなければいけないということなのではなかろうか。ありのままの自分の思いを押し込め、意味づけされた犠牲のために死を選ばせる神は、本当の神ではないと言っているのだ。自分の思いが直接他者への思いとなり、それがそのまま行動にもなるのを可能にするのが、ジョバンニの言う神なのではないだろうか。よってカムパネルラの行った天上も、ジョバンニの求めたものとは違うだろう。ザネリのために命を捧げたのではなく、世界に意味づけられた「いいこと」（七）の実現のために死を選んだのだから。死を母の幸を求める自分の行動とすることにより、対世界での身のあり方を決めたのだ。母を思う自分、搦れたザネリを目の前にした自分、カムパネルラの内と外では一致できないのだ。内なる自分がそのまま対世界の自分と同一になれる場所、それが「天上よりももっといゝとこ」（九）なのではないか。そこへ行くことのできる者として、ジョバンニがいるのではないだろうか。

ジョバンニは通学しながら、「朝にも午后にも」（一）仕事をしているという、大変な生活を送っている。母親が病気ではなくて働くことができたならば、ジョバンニはそのような生活をしなくてすむと考えられるのである。私から見れば、ジョバンニは家のために自分を犠牲にしているととらえられる。だがジョバンニはそのようには意識していない。青年やカムパネルラは、内なる自分と外の世界の中での自分との間の葛藤の結果、犠牲になったといえよう。一方、ジョバンニにはそれがない。母を思う内なる自分と、活版所での労働、あるいは牛乳を取りに行く身のあり方、すなわち外なる自分は一致しているのだ。母という他者のための身のあり方、しかもジョバンニの身の内外の一致という点が、「ジョバンニの切符」（九）を手に入れる条件につながるのではないだろうか。

そしてこの切符から、「ほんたうのさいはひ」の手がかりが見つけられるのだ。「十ばかりの字を印刷したもの」（九）であることから、その描写で「十」が頻出している鷺の「押し葉」（八）と、「ボス」（七）の化石とつながりがあると思われる。

鷺は「天の川の砂が凝って、ぼおっとできる」（八）鳥であり、舞い下りると「熔鉱炉から出た銅の汁のやうに」（八）砂に融けてしまうのである。何匹かは鳥捕りに作物でも収穫するように簡単に捕えられてしまう。すると鷺は「かたまって安心して」（八）死んでいく。鷺は捕らえられても全く反抗せず、鳥捕りと

対立する気配はない。生きているもののほうが融けて消えてしまい、死体のほうは「押し葉」（八）となり形として残るのだ。このように鷺は天の川という全体でありつつ、鳥の形をした個でもあるととらえられよう。鷺のあり方は、生死といった二項対立関係や自分と世界との分裂のない状態であり、内も外も一致する姿の表れと考えられる。

「ボス」の化石については、発掘している大学士が「証明するに要る」（七）と述べている。

「ぼくらとちがったやつからみてもやっぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空かに見えやしないかといふことなのだ」（七）

切符のことをジョバンニ自身が、「たしかあれは証明書か何かだったと考へて」（九）いるのを忘れてはならない。何を証明するかといえば、「どこでも勝手にあるける」（九）ことを証明するということがまずあるだろう。そればかりではない。「ほんたうにいいこと」と「ほんたうのさいはひ」を証明する意味もこめられているのだ。青年やカムパネルラの行動は、「いちばんのさいはひ」が人のための犠牲である、「いいこと」であるという考えに基づくものだった。だがそれは自分の内からの思いではない。世間で意味づけされたものに従っただけなのである。だからジョバンニは、「ほんたうのさいはひは一体何だらう」（九）と自らに問い、「きっとみんなのほんたうのさいはひをさがしに行く」（九）ことになるのだ。「さがしに行く」ための証明書であり、「ほんたうのさいはひ」の証明書ともなりうるのである。

「ほんたうのさいはひ」を考えるジョバンニにとって、「蝎の火」（九）の話は大きな影響を与えているばかりか、彼自身をも象徴していると思われる。蝎は食物連鎖の中心でしかなく、食べる側でしかなかった。ところがいたちに追われ、井戸の中という無の空間へ落ちてしまう。そこで彼は自分に食べられる虫の身となり、今まで関わることのなかった外の世界のいたちの身にもなる。そうして「まことのみんなの幸」（九）を考えるようになるのだ。それはまるで銀河を旅したジョバンニの姿でもある。見られるのみの立場から、銀河鉄道に乗ることにより、自ら見る立場となる。鳥捕りや他の乗客たちとの関わりの中から、今まで自分の外として分裂していた他者や世界に対する自分を見つめ、「ほんたうのさいはひ」を求めるジョバンニが生まれたのだ。蝎の「私のからだをおつかひ下さい」（九）という内より生じた思いは、そのまま「まっ赤なうつくしい火」（九）となる身体と一致するのだ。それは外の世界に対して対立するものではない。「まことのみんなの幸のために」（九）「よるのやみを照らしてゐる」（九）光となるのである。光という全体を照らす、一つの星となるのである。「ほんたうのさいはひ」を求めるジョバンニの指標というべきものであろう。

つまり、「ほんたうのさいはひ」とは、ありのままの内なる自分が、外の世界や他者と一致する世界の実現なのではなかろうか。いや、実現ではないかもしれない。そうなって初めて「ほ

んたうのさいはひ」が見えるのかもしれない。「ぼくらとちがったやつからみても」（七）同じになるという、自分と他者が一つの意識をもち、全体でもあり、なおかつ鷺のように個としても存在できる世の中。個人の「ほんたうのさいはひ」が皆の「ほんたうのさいはひ」であり、「蝎の火」のように一つ一つの光でありながら全体を照らす大きな光となり得る世界へとつながるのではなかろうか。内なる自分がそのまま外なる自分でもあり、その自分と他者とも一致できる、自分が他者である世界。そういった中で我としても存在すること。それが「ほんたうのさいはひ」への手がかりであるのだろう。

しかし、その道のりはあまりにも遠いのではないか。自己主張が他者への思いであり、世界との融合となる証明書がジョバンニの切符であるとすれば、同じようにその不可能性を示すのが、「石炭袋」（九）ともいえよう。「何だかその中へ吸ひ込まれてしまふやうな」（九）切符。「大きなまっくらな孔」（九）である「石炭袋」も、その底は測り知れなく、無限の深さなのである。二つは表裏一体なのかもしれない。

ジョバンニは「ほんたうのさいはひ」が他の人々から見てもそう見えるかどうか、「証明」できなければならない。そのために関係の中にいるだけでなく、「ぼくらとちがった」立場になって、匂や祈りのように同じ感覚、同じ認識がもてるかどうか、自らの目で見極めねばならぬのだ。そうして初めて何が「ほんたう」か、「さいはひ」か見えてこよう。

しかし、目の前には「空の孔」が広がっていることは確かなのであり、そこを乗り越えなければ、存在の裂け目をつなぎ合わさなくては、「ほんたうのさいはひ」にはたどりつけないのだ。だからこそはてしない旅となり、「どこまでも行ける」（九）切符が、ジョバンニに必要なのである。求めようとすることこそ、ありのままの姿であり、「ほんたうのさいはひ」であるのかもしれない。

「なにがしあはせかわからないのです。ほんたうにどんなにつらいことでもそれがたゞしいみちを進む中でのできごとなら峠の上りも下りもみんなほんたうの幸福に近づく一あしづつですから」（九）

旅を終えると「胸いっぱいのかなしみに似た新らしい気持ち」（七）が私を包む。それはジョバンニたちが祈りにより感じるように、この作品そのものが、孤独であり何ものにもとらわれぬ私の存在を確認させるからではないだろうか。同時に、自分のあり方をも見つめなおすことへ導くように思う。ジョバンニの孤独をとおして私はカタルシスを味わうことになり、この生を新たな旅立ちの如く、意味づけ、感じることができるのだといえよう。

銀河の旅から私は自らの生への切符を手に入れるのである。そして、「ほんたうのさいはひ」へ近づくべく、その一歩を踏みだしていく。

〈注〉

(1) 市川浩『〈身〉の構造―身体論を超えて―』(一九九四年四月十日講談社)所収の第II章「〈身〉の構造とその生成モデル」、九一頁。

(2) 原田勝正、小池滋、青木栄一、宇田正編『鉄道と文化』(一九八六年七月一日、日本経済評論社)所収の第2部「鉄道と文化現象」、一〇九頁から一一五頁よりヒントを得る

(3) 注1に同じ。但し、一〇六頁。

(4) 注1に同じ。但し、一〇五頁。

(5) 注1に同じ。但し、一〇四頁。

(6) 注5に同じ。

(7) 中村雄二郎、山口昌男『知の旅への誘い』(一九八一年四月二十日岩波書店)所収の第一章「知の旅へ」、四一頁。

(8) 河合隼雄『無意識の構造』(一九七七年九月二五日中央公論社)所収の第V章「自己実現の過程」、一五六頁。

(9) 注7に同じ。

(10) 注1に同じ。但し、第III章「生きられる空間」、一六四頁。

〈附記〉

1 底本『新修宮沢賢治全集』全十六巻・別巻一(一九八六年十月十五日～一九八九年二月二五日、筑摩書房刊)本論文中の引用文は底本に依った。